

第 2 8 回

宮崎整形外科懇話会

プ ロ グ ラ ム

日 時 平成 6 年 7 月 1 6 日 (土)
1 5 : 2 0 開会

会 場 J A ・ A Z M ホール (大研修室)
(宮崎市霧島 1-1-1 TEL. 0985-31-2000)

事務局 宮崎医科大学整形外科学教室内
〒 8 8 9 - 1 6
宮崎郡清武町大字木原 5200
TEL 0985-85-1510 (代) 内線 2220
0985-85-0986 (直通)
FAX 0985-84-2931

—— 参加者へのお知らせ ——

1. 参加費；会場受付で申し受けます。 1000円（受付14:50 より）
2. 年会費；未納の方は受付で納入お願いします。 5000円

—— 演者へのお知らせ ——

1. 口演時間；1題6分、討論3分程度とします。
2. 口演用スライド；単写とします。演者は講演30分前までにスライドをスライド受付に御提出下さい。

—— 世話人会のお知らせ ——

14:40 ～ 15:10 大研修室・控室（2階）

—— 特別講演のお知らせ ——

17:00 ～ 18:00 大研修室（2階）

『髓内釘骨接合術の進歩』
九州労災病院院長
山 本 真 先生

註 上記講演は日本整形外科学会教育研修会（1単位）に認定されておりますので、御参加下さい。
尚、受講料 1000円を申し受けます。

15:20 開 会

15:20 一般演題 I. 座長 戸田 勝

1. 手指に発症したPeritendinitis calcarea の1例
宮崎県立日南病院整形外科 柏木 輝行
2. 示指基節骨に発生した類骨骨腫 osteoid osteomaの一例
宮崎県立宮崎病院整形外科 吉本 栄治
3. 仮骨延長法 (Callotasis) による前腕延長を行った1例
社会保険宮崎江南病院整形外科 矢野 浩明
4. 当科におけるMRSA感染症例の検討
宮崎医科大学整形外科 福元 洋一

16:00 一般演題 II. 座長 小林 邦雄

5. 馬尾神経領域に発生したepidermoid cyst の1例
宮崎県立宮崎病院整形外科 大石 聡
6. 膝関節滑膜肉腫の治療経験
宮崎医科大学整形外科 山本恵太郎
7. MRIによる膝半月板損傷の診断
宮崎県立宮崎病院整形外科 佐本 信彦
8. 大腿骨頸部外側骨折に対するGamma nailの使用経験
宮崎市郡医師会病院整形外科 渡部 正一
9. 頸椎片開き式脊柱管拡大術の長期成績
宮崎医科大学整形外科 本部 浩一

17:00 特別講演 座長 田島 直也

『髓内釘骨接合術の進歩』
九州労災病院院長
山本 真 先生

18:00 閉 会

開 会 (15:20)

一般演題 I. (15:20~16:00) 座長 戸 田 勝

1. 手指に発症した Peritendinitis calcarea の 1 例

宮崎県立日南病院整形外科

○柏木 輝行 長鶴 義隆
黒田 宏

肩関節周囲における石灰沈着性腱周囲炎は日常診療において比較的多く遭遇する疾患であるが、手指での発症はさほど多いものではない。今回我々は、過去6年間にわたり手指に再発を繰り返した石灰沈着性腱周囲炎の1例を経験した。症例は44歳女性、事務職員。昭和62年4月15日特に誘因なく左小指MP関節に疼痛出現し受診。局所の圧痛、腫脹、軽度の熱感を認めX線上左小指MP関節周囲に石灰沈着像と思われる異常陰影を認めた。以後平成5年までの6年間に右示指PIP関節、右環指PIP関節、左示指PIP関節、左小指PIP関節にも数回にわたり再発を繰り返した。いずれの関節も発症後10日から2週間以内に保存治療により症状は軽快しX線上も石灰沈着像と思われる異常陰影は消退もしくは軽快している。臨床所見、検査所見、X線の経過よりPeritendinitis calcareaと診断した。上記の症例について文献的考察を加えて報告する。

2. 示指基節骨に発生した類骨骨腫 osteoid osteomaの一例

宮崎県立宮崎病院整形外科

○吉本 栄治 佐本 信彦
大石 聡 小林 邦雄
徳久 俊雄 高妻 雅和
松本 光司

osteoid osteoma (以下0.0.)の好発部位は四肢長管骨であり、指骨に発生することは稀とされる。またその好発年齢も70%以上が20才以下であり、男性に多く見られる。今回我々は、中年女性の指骨に発生した0.0.の稀な症例を経験したのでここに報告する。

【症例】52才 女性 平成3年12月 右示指基節部の腫脹と痛み出現し近医受診するも異常見られなかった。平成4年5月症状変化なく当科受診。PIPj周辺に腫脹、圧痛を認めた。発赤、熱感なし。レントゲンにて異常みられなかった。他関節に異常見られなかった。初診時RAtest(1+)、他特に異常見られなかった。ボルタレンにて痛み軽減し、リウマチ性単関節炎疑いにて経過観察行った。平成5年10月(初診後17ヶ月後)レントゲンにて異常見られ0.0.の診断にて搔爬、骨移植を行った。術後痛み消失し現在術後6ヶ月にても痛みは見られていない。

3. 仮骨延長法 (Callotasis) による前腕延長を行った1例

社会保険宮崎江南病院整形外科

○矢野 浩明

戸田 勝

金井 純次

飯干 明

宮崎医科大学整形外科

田島 直也

【はじめに】仮骨延長法は、近年脚短縮症などの治療法として一般化されつつある。今回我々は、前腕短縮に対し本法を用いて矯正を行った1例を経験したので報告する。

【症例】8歳女児 骨軟骨腫による左前腕部短縮。(尺骨42mm、橈骨35mmの短縮) 骨軟骨腫摘出後、尺骨、橈骨それぞれをMONO-tube (small)を用い延長した。

【結果】延長距離は尺骨：39mm、橈骨：29mm、MONO-tube装着期間は尺骨：186日、橈骨：163日、骨を1cm延長するのに必要とした日数を表すhealing index(day/cm)は、尺骨：47.7 橈骨：56.2であった。合併症は延長時の疼痛としびれ感、抜釘時の仮骨骨折であった。

【まとめ】仮骨延長法による前腕延長を行ったので報告した。

4. 当科におけるMRSA感染症例の検討

宮崎医科大学整形外科

○福元 洋一

田島 直也

桑原 茂

平川 俊一

久保紳一郎

田辺 龍樹

黒木 浩史

本部 浩一

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌 (MRSA) による感染症は、整形外科領域では難治性の骨関節感染症が多く問題となっている。また、院内感染の病原菌としても重要である。今回我々は、平成3年より平成5年までの間に経験したMRSA腸炎の2例を含む6例のMRSA感染症例について検討するとともに病棟内における細菌汚染状況を調査しMRSA感染症の対策について検討したので若干の文献的考察を加え報告する。

一般演題Ⅱ. (16:00~16:50) 座長 小林 邦 雄

5. 馬尾神経領域に発生したepidermoid cyst の1例

宮崎県立宮崎病院整形外科

○大石 聡 徳久 俊夫
小林 邦雄 高妻 雅和
佐本 信彦 松本 光司
吉本 栄治

【目的】epidermoid cyst(類表皮腫)は主として四肢末端真皮内に多く、中枢神経系の発生は少ない。その多くは頭蓋内に発生し、脊柱管内発生は稀である。今回我々は馬尾神経領域に発生したepidermoid cystの1例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

【症例】21歳、女性。1年前より腰痛あり、3ヶ月前より左下肢痛が間欠的、発作的に出現した。レ線にてS₁に潜在性二分脊椎を認め、MRIではL_{3/4}レベルにT₁強調像で脊髄液よりややhigh、T₂強調像でhigh intensityを呈し、Gd-DTPAにて周囲のみ enhanceされる硬膜内髄外腫瘍を認めた。神経鞘腫のcystic degenerationを疑い腫瘍摘出術を施行した。術中所見では、腫瘍は光沢のある薄い被膜に包まれ馬尾神経及び硬膜に癒着し、内容物は灰白色豆腐粕様で非常に脆かった。組織学的には、重層扁平上皮に囲まれ内部はケラチン様物質にて満たされていた。術後症状は完全に消失した。

6. 膝関節滑膜肉腫の治療経験

宮崎医科大学整形外科

○山本 恵太郎 田島 直也
桑原 茂 福田 健二
津曲 孝康

【目的】滑膜肉腫は、比較的稀な悪性腫瘍であるが、今回、臨床経過が長く診断が困難であった滑膜肉腫の一例を経験したので報告する。

【症例】34歳、男性。1989年頃、特に誘因なく右膝痛が出現。近医受診し右膝外側半月板損傷の診断にて、1992年10月1日、右膝外側半月板部分切除を受けたが、その後も症状軽減しない為、1993年8月2日、当科外来初診し、1994年1月25日入院となった。同年2月7日右膝鏡視下生検を施行し、滑膜肉腫と診断。同年2月17日、広範囲腫瘍切除及び人工関節による再建術を施行した。術後は、化学療法を行い、局所再発及び遠隔転移は、現在のところみられていない。

【考察】滑膜肉腫は、他の悪性腫瘍と比較し、比較的経過が長いものも存在する為、診断確定には充分注意を要する。

7. MRIによる膝半月板損傷の診断

宮崎県立宮崎病院整形外科

○佐本 信彦
高妻 雅和
小林 邦雄
山田 浩己

松本 光司
徳久 俊雄

宮崎県立宮崎病院放射線科

近年、MRI画像の進歩は著しく、我が国でも急速に普及している。特に moving artifactの少ない整形外科領域では広く応用され、脊椎領域、腫瘍性疾患はもとより膝関節障害でも高い評価を得ている。今回、我々は膝関節障害にたいしてMRIを施行し、かつ関節鏡を行い関節内所見を得た89例90膝を調査対象とし、MRIによる半月板損傷の診断能を検討した。パルス系列はスピンエコー法を用い、矢状断像では、T1強調画像、中間画像、T2強調画像、また、冠状断像では、T1強調画像、または、中間画像およびT2強調画像を撮像した。スライス厚は5mm、マトリックスサイズは256×256である。MRIにおける半月板の形態はMinkの分類を用いgrade0、1、2を正常とし、grade3を断裂と診断した。以上を用い関節鏡所見と比較検討したところ、全半月板の診断能はsensitivity 88.2%、specificity 89.1%、accuracy 88.8%であり、高い診断能が得られた。

8. 大腿骨頸部外側骨折に対するGamma nailの使用経験

宮崎市郡医師会病院整形外科

○渡部 正一
園田 典生
田島 直也

川越 正一

宮崎医科大学整形外科

【目的】今回我々は、大腿骨頸部外側骨折に対する治療法として、髓内釘とsliding lag screw及びdistal locking screwを組み合わせたGamma nailを経験したので若干の考察を加え報告する。

【対象及び方法】1992年9月より1994年5月までに当院においてGamma nail施行した大腿骨頸部外側骨折の男性20例、女性85例の計105例、平均年齢81.1歳(16~99歳)を対象とし、手術時間、出血量、キャスト歩行までの時間、sliding nail近位の大転子からの突出等について検討した。

【結果】平均手術時間は横止め無しで49.4分、横止め有りで71.2分。平均出血量は横止め無し37.1ml、横止め有りで49.8mlであった。キャスト歩行まで平均13.3日、slidingは1週目平均2.6mm、2週目平均3.4mmであった。nail近位の突出は平均4.3mmであった。

【結語】Gamma nailは手術侵襲の少なさや不安定型に対しても比較的早期より荷重可能な点において優れた固定法と言われている。我々の症例でも手術侵襲が少なく短時間で行え、早期荷重可能であった。しかしnail近位の突出は今後検討を要する課題と思われる。

9. 頸椎片開き式脊柱管拡大術の長期成績

宮崎医科大学整形外科

○本部 浩一 田島 直也
平川 俊一 久保 紳一郎
田辺 龍樹 黒木 浩史
松元 征徳 福元 洋一

【対象】1984年より当科にて片開き式脊柱管拡大術を施行し、術後5年以上の経過を観察し得た男性14例、女性3例の計17例について検討した。疾患別では、OPLL13例、CSM4例で、術後平均6年6ヶ月（5年2ヶ月～10年1月）であった。

【結果】臨床改善率においては退院時平均が41.6%、術後1年で46.2%となり改善傾向にあったが、その後ほぼ横ばいとなり、術後5年時には42.0%であった。頸椎可動域は術前の約1/2に減少し、頸椎柱彎曲指数も全例で減少していた。拡大率においては術直後で15.3%であったが、術後5年13.2%と漸減傾向にあった。

【考察】手術時年齢、彎曲指数の減少度、さらにOPLLにおける骨化増大の有無で臨床改善率に有意差が存在した。一方、術前のJOAスコア、拡大率で改善率に有意差は存在しなかった。このことより予後を左右する因子としては前者が考えられる。

——— 休 憩 ———

特別講演 (17:00~18:00) 座長 田 島 直 也

『髄内釘骨接合術の進歩』

九州労災病院院長
山 本 真 先生

閉 会